



令和7年
1月15日号
第64号
発行
内政政治
研究G
代表 宮田修一

台湾有事の「尖閣・先島諸島の海上封鎖」に現実味

宮古海峡を中国海軍と海警局が共同航行

読売新聞は元日付の朝刊で、中国海軍と海警局が昨年12月、沖縄本島と宮古島の間にある「宮古海峡」周辺で初めての共同航行を行ない、重武装の海警船団が尖閣諸島周辺に派遣されたとの記事を掲載しました。2023年に台湾と

与那国島間の海域で確認されていますが、宮古海峡で確認されるのは初めてです。台湾有事の海上封鎖が我が国の尖閣諸島や宮古島・与那国島など先島諸島にも及ぶ危険性が現実味を帯びて来ています。

封鎖の第一段階は重武装の海警局か

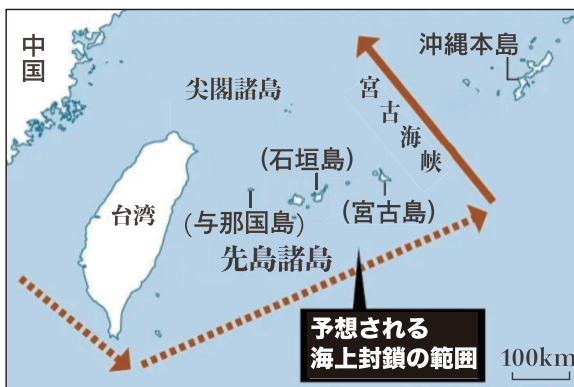
中国による台湾侵攻については、台湾を取り囲む海上封鎖から始まることが想定されます。中国にとっても、反撃による損傷を少しでも減らす必要がありますから、いきなりミサイル攻撃や上陸作戦に出ることを予想するのは現実的ではありません。

専門家の間では、海上封鎖の第一段階として、日本の海上保安庁にあたる海警局の船艇が最初に前面に出て作戦行動を

起こすとの見方があります。米軍や自衛隊が軍事的に直接的な関与をしにくくするための戦略です。それでも、海上封鎖（blockade）自体は軍事行動ですから、何らかの国内法にもとづく「法執行」という建前を使って、封鎖や臨検などの動きに出ることが考えられます。海軍は後方以待機して日米の軍事的反撃を牽制し、展開次第で駆けつける体制で臨むことになるでしょう。

並行して台湾の重要インフラへの徹底的なサイバー攻撃も想定されま

す。関係者によると、台湾では今も毎日大小400万件というさまざまな数の攻撃があり、台湾併合に向けた準備との指摘もあります。



後方では海軍が日米の軍事関与を牽制

台湾有事がどのような形で始まるかは、台湾併合の野心を隠さない「習近平」の判断次第ですが、少なくとも日本近海では海警局と海上保安庁の「せめぎ合い」になると考えられます。海保の「沿岸警備」としての操船技術などの能力は世界一と言われますが、今回確認された海警局の船艇は世界最大の1万トンもあり、装備は海

軍仕様です。海上保安庁の警備艇の機関砲の2倍近い76ミリ砲（射程10〜15km）を備えており、写真などで確認できますが、船体側面には、装甲の防御力を保つため、外部の光や空気を採り入れる「舷窓」がありません。海警局の英語名は「沿岸警備隊」を意味する「China Coast Guard」ですが、事実上の軍艦なので、年々、その能力を強化していると言われ、「第二海軍」と呼ぶ識者もいます。

海警局が海上封鎖という実力行使に出ている間、中国海軍は具体的にどう動くのか。東シナ海を自国の「内海」にしよ

防衛研究所分析「中国が新興国への影響強化

防衛省のシンクタンク「防衛研究所」は昨年12月、中国の軍事・安全保障の動向についての「中国安全保障レポート2025」を公表しました。中国は発展途上国の「代理人」として、対外援助・融資を通じて、グローバルサウス（インド、トルコ、南アフリカなど新興国の総称）への軍事拠点の建設や艦艇寄港などで影響力を強めていくと分析。東アジア地域における力による一方